

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

平易な英語で書かれた本ならば多読ということも可能だし、推奨されるが、ある程度語学的にも内容的にも高度な本であるならば精読することなしに、理解することは難しい。この授業では、個々の語彙の意味や文法をおろそかにしないでじっくり腰をすえて英語を読む訓練を行い、正確に英語を読む力をつけることを目標とする。

到達目標 Course Goals

語彙、文法に注意を払いながら、英語を正確に読めるようになることを目標とする。

授業計画 Course Schedule

- W1 ガイダンス
- W2 Ch.I The Distinctiveness of the Japanese
- W3 "
- W4 Ch.II Like and Unlike
- W5 "
- W6 Ch.III Traditions East and West
- W7 "
- W8 Ch.IV The Family
- W9 "
- W10 Ch.V Friends
- W11 "
- W12 Ch.VI Education
- W13 "
- W14 Ch.VII Jobs
- W15 "

成績評価の基準と方法 Grading System

平常点（小テスト+予習の度合い）に基づく。

理由の如何を問わず、欠席／遅刻が4回以下であることを単位取得の必要条件とする。

■授業の取組・工夫等について

1. 授業の目的・内容

この授業は、英語の高度な読解力を養うことを目的としたものである。テキストとして日本について書かれたエッセーである Donald Keene 著、The Distinctiveness of the Japanese を用い、教室では一文ごとに指名し、訳読させ、解説を加えるというオーソドックスなスタイルをとった。

2. 授業実行上の取り組み・工夫

この科目は、英語の教職免許状取得に必要な「教科に関する科目」に充当することができるため、英語・英文学専攻の学生が履修することが多いが、教職とは関係なく純粋に英語の読解力を高めたいという理由で履修する学生も多い。そのため、テキストとしては文学作品などではなく、学生にとって最大公約数的に関心をもてる「日本」に関する英文を読むことにしている。これは日本人として外国人と接する際、日本について聞かれることが圧倒的に多いので、日本のことを英語できちんと説明できるようになってほしいということも考えてのことである。

毎回の授業の最初に、前の週に読んだ部分に関して、単語と英文和訳の小テストを行い、成績評価はこの小テストと平常点（きちんと予習をして授業に臨んでいるか）を基に行った。毎回小テストを行うことで、学生の遅刻はほぼ皆無であったし、回収したテスト用紙を基にアトランダムに学生を指名することで、ある程度の緊張感を保つことができた。

さて、外国語の4技能であるリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングは、2つの軸で分類することができる。1つは、受信・発信の軸で、リーディング・リスニングが受信、ライティング・スピーキングが発信ということになる。もう1つが、書き言葉・話し言葉の軸で、リーディング・ライティングが書き言葉、リスニング・スピーキングが話し言葉に関わる。書き言葉と話し言葉の大きな違いは、言語活動を行う上での時間的制約の緩急にある。書き言葉は時間的制約が緩く、じっくり読んだり、推敲しながら書くことができるのに対して、話し言葉は時間的制約がきつく、瞬時に反応しないとコミュニケーションが円滑に進まない。一般論として、時間的制約が緩い中でできないことが時間的制約がきつい中でできるわけではない。早い話が、読んでわからないものは聞いてわかるはずがないし、書けないことが口からすらすら出てくるはずがないのである。その意味で、外国語学習においては、時間的制約の緩いリーディングとライティングにおいてまず基礎力を養うというのは理に叶っている。一方、リーディングとライティングの関係は、前者が受信、後者が発信に関わるものである。これも一般論として、受信（インプット）による知識の蓄えなくして発信（アウトプット）はあり得ない。こう考えると、リーディングが外国語を習得する上で鍵を握る技能であることがわかる。

この授業では、こうした考えを説明した上、単になんとなく英文の大意がとれさえすればよしとするのではなく、アウトプットを意識しながら緻密なリーディングを行うよう学生に促した（かつての英語名人たちはこれを「英作文的読書」と呼んだ）。すなわち、(1)日本のこのことを外国人に対して説明するとき、こういう単語や言い回しを使えばいいのか、(2)この語彙・文法事項はこういう風に使うのか、といった意識を常に持ちながらテキストを読むよう促した。例えば、冠詞は英文の大意をとる上ではあまり気にかける必要がないかもしれないが、英語を使う段になると、定冠詞を使うか、不定冠詞を使うか、何も使わないかの選択を迫られることになる。そのため、教室ではテキストの文脈に即してここではこういう理由でこの冠詞が使われているのだといった説明をかなり詳しくおこなった。

3. その他

コミュニケーション重視の語学教育全盛の中で、訳読方式の授業は日本人の英語ベタの元凶であるかのように言われ、はなはだ評判がよろしくない。しかしながら、30名ほどの学生がこの授業を履修し、授業アンケートで高く評価してくれたということは、時代の趨勢に流されずに英文をきちんと読めるようになりたいと願う学生が文学部には少なからずいることを示しており、たいへん頼もしく感じられる。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 疑問に思ったことを適切に回答して下さったこと。
- ・ inputとして重要な英語を“読むこと”と真剣に向き合える時間として、非常に有意義であった。
- ・ 丁寧に説明していただけてわかりやすかった。
- ・ 先生の人柄。
- ・ 教材が興味の持てるものであったし、難易度が適切で読み応えがあった。
- ・ 一文一文をていねいに訳していくことで英語の文章の理解を深めることができた。小テストを毎回行ったことで単語の知識が身に付いたので良かったです。
- ・ 教材の本の分量が多すぎず、内容も良かった。ただ、初版も1983年のもので、当時の状況が古く感じた。
- ・ 個々人に当てることで差異なく行われていたと思う。
- ・ ところどころで質問があるかどうか聞いてくれたり、英文中にある表現についてきちんと説明してくれていた点。
- ・ 毎回予習することで理解を深められた。教員の説明が分かりやすかったし、いつも気になる所を教えてもらうことができて良かった。
- ・ 一段落読むごとに質問の有無を確認したりと、進行が非常に丁寧であったこと。
- ・ “書くためには”を目的に、細かい点まで、使い分け方などを教えてもらえた点。

- ・ 細かい説明がわかりやすかったし、色々知ることができた。先生のコメントがおもしろかった。
- ・ 自分が今後どのように英語を学んでいけばいいか知ることができたから。
- ・ 教員の説明がわかりやすかった。話も聞き取りやすかった。
- ・ 先生の話がわかりやすくておもしろかったです。
- ・ 英語学習をより進んでしたくなった。知的刺激を受けた。この授業を取って良かった。
- ・ テストもレポートもないこと。
- ・ 英語を普段意識できない深いレベルまで探り下げて読解していくので、良かった。
- ・ 興味のわく題材だった。教材が安くてよい。1000円を切るのはありがたい。
- ・ 授業で使われた教材が、日本や日本人に関するものだったこと。